

多くの専門職で支える 高齢者福祉施設の生活



東京都高齢者福祉施設協議会
マスコットキャラクター「アクティブブル」

東京都高齢者福祉施設協議会とは？

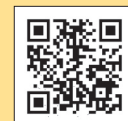
東京都高齢者福祉施設協議会(高齢協)は、社会福祉法人東京都社会福祉協議会(東社協)の業種別部会連絡協議会に属する部会の一つとして、東京都内の特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、軽費老人ホーム、地域包括支援センター、在宅介護支援センター、デイサービスセンターを会員とする組織です(会員数1,200施設・事業所)。

東京都の高齢者福祉の発展と、福祉サービスの質の向上を目指し、業種別、職種別、テーマ別による委員会活動をおこなって、研修会の企画や調査研究、提言活動、ネットワークづくりに取り組んでいます。

SNSでも活動情報発信中!

Facebook

Twitter



社会福祉法人 東京都社会福祉協議会 東京都高齢者福祉施設協議会

超高齢社会を迎えた日本では、今後も介護の需要は高まっています。本特集では介護に携わる方々の取材を通じて、イメージが先行しがちな業界の「リアル」を紹介します。



にしむら あきひこ
西村 明彦
ひのでホーム
介護福祉士
現場での介護を行う専門職。ご利用者と接する時間が最も長く、生活とそとの楽しみに関する視点を持つ。

かとう みすず
加藤 美鈴
偕楽園ホーム
看護師
医療に関わる専門職。施設では低栄養状態からの回復や口から物を食べることを維持すること(経口維持)を重視。

あおき まさこ
青木 昌子
ひらお苑
管理栄養士
ご利用者一人ひとりに合わせた栄養管理や食事の提供を行い、栄養ケアマネジメントを通じてご利用者の健康を維持する。

ほずみ すほこ
保住 州千子
マザース日野
介護支援専門員
(ケアマネジャー)
ご利用者の介護の方向性を決めるケアプランの作成と、それに基づいた各職種間の調整を行う。ご利用者のご家族との接点も多い。

若手スタッフ座談会

「食支援」で発揮される専門職の連携

特別養護老人ホーム(以下、特養)では、多くの職種がそれぞれの専門性を発揮し、協働して高度なサービスを提供しています。今回は都内の特養に勤務する専門職の方々にお集まりいただき、高齢者の健康維持にとっても大切な「食を通じた生活支援」(以下、食支援)をテーマに座談会を行いました。



◎ 施設における食事の重要性

青木: 高齢者にとって食事は大切で、適切でないとい体調不良から肺炎、脱水、尿路感染などにかかり入院につながります。また、加齢による嚥下(のみこみ)の力の低下や脳梗塞による口腔麻痺などからむせこんで肺炎のリスクが上がったり、認知症の方は食事中に食事に集中できないなど、高齢者の食事には困難が発生することがあります。そのため個々に合った食支援はとても大切です。
加藤: 物が食べられないとき、病気によるのが認知機能の低下によるのかなど、その理由の確認

が大切です。薬の副作用で食べられない場合は医師に、認知機能の低下の場合は介護職員に、口に入れるけど飲み込めないなら管理栄養士になど、状況に応じて専門職と解決法を探ります。体調の変化は食事に起因することが多くあります。たとえば全身にむくみが出ている方の生活を観察すると、好きな漬物を毎日食べ塩分過多だったケースもあり、バランスよく食べてもらうことが必要です。
西村: ご利用者にとって食事は日常の楽しみなので、一人ひとりが食事を楽しめるようさまざまな工夫をしています。食事中の動作の問題や食事量などを生活ケアの中で確認し、その分野の専門職につなぎます。
保住: 高齢者の食支援には情報共有が大切です。食べられない状態があったときに、他の専門職と相談し、食べられる物だけを提供する、ご家族に好きな物を買ってきてもらうなど、その方の健康状態やご利用者・ご家族の希望に合った方向性を決めて、ご家族の同意を得て各職種で共有して対応しています。

◎ 各職種が行う食支援

青木: 状態が悪くなったときは、早期の食支援により回復が早くなるため、そのタイミングを見落とさないよう、定期的にご利用者の食事の様子を見ています。また、褥瘡(床ずれ=寝たきり

などで血流が悪くなり皮膚がただれたり傷ができたりすること)・体重低下・食量量の低下など、低栄養の高リスクとなる要素を重点的に観察する栄養ケアマネジメントを実施しています。
保住: ご利用者それぞれの体調・噛む力・飲み込む力などに応じて、量・柔らかさ・一口のサイズなどの要素で5段階に分けた食形態を提供しています。リスクの高い方には2週間に1度体重測定を実施し、多職種で相談して臨機応変に食事内容や取り方を変更しています。
西村: 食事の介助やセッティングなど、食環境の整備を行っています。ご利用者の食の好みや何をどれぐらい食べたかといった情報を共有することが、よりよい食事の提供につながります。認知症の影響で、食事をうまく認識できない場合は集中できない環境が原因である場合があります。たとえば食事は一人で取りたいという場合もあるため、定時の食事にこだわらず、ご利用者の希望を聞き様子をうかがって、よい環境づくりを心がけています。

◎ 食支援における連携

加藤: 私たち以外にも、施設の食支援には多職種が関わります。訪問歯科医はうまく飲み込めない方に喉の検査を行い、食形態を考えます。口腔ケアを怠ると口内の細菌が増え肺炎のリスクが高まるため、歯科衛生士はその指導に注力

しています。理学療法士は誤嚥しにくい食事の姿勢や手の動作を指導し、作業療法士は心身能力に応じた食器を準備します。職員には言いづらい要望もボランティアスタッフには言ってもらえることがあり、そうした情報は食支援にとっても有効です。
スタッフの強みを見つけることも大切で、ご利用者の癖を知っている、人間関係ができていなどの要素から、ある職員のときだけ食事がうまくいくこともあるため、そうしたことも目を配ります。
西村: 私の施設では言語聴覚士が、むせを防止するために食事前に発声や口腔体操を行います。また、胃ろうの方が訓練により通常食になったときにはご利用者・ご家族ともとても喜ばれ、連携の醍醐味を感じました。
また、調理師によるウナギのかば焼きやそば打ち、音楽を流す、スタッフが揃いのエプロンを付けるなど、味覚以外でも楽しめる企画もしており、食事中の話づくりにも役立っています。
保住: ご家族との連携もとても大切です。食形態はご家族の希望が反映されますので、施設でのご利用者の食の状況も共有しています。また、ご家族からの差し入れ※はとても喜ばれますので、食べられる物の条件を説明したうえで、できる限りご家族に支援に参加していただくようコミュニケーションをとっています。
※ご利用者への差し入れの受け入れ状況は、施設によって異なります。

◎ 連携を通じてご利用者に喜びを

加藤: 熱が出がちなご利用者がいたときに、医療的な措置はしていないのに治っているというケースがあります。その方をよく見るとご家族の差し入れや、介護職員による食事のサイズや柔らかさのチェックがあったりします。一つの専門職では持ちえない多様な視点からの食支援がご利用者の生活を支えています。
青木: 施設ではご利用者に食べる意欲があっても、機能の低下により食べられないことがありますが、皆で考え支援して、最期まで口からの食事を取れた方はとても幸せそうで、ご家族にも喜ばれるとき、達成感を得られます。言葉に発せられない意欲や思いもくみ取り、食支援を充実させていきたいです。
保住: 施設での食事も大切ですが、健康状態を見ながらときには外出をして、レストランで食事を楽しむといった地域とのつながりは、ご利用者の生活に彩りを加えます。その実現のハードルは高く多職種で協力することが必要ですが、施設の中で生活を完結させないよう意識しています。
西村: 多職種が連携しないと介護は成り立ちません。それぞれの職種はご利用者の健康な生活や楽しみのため考えており、その優先順位を確認し合い協働して、ご利用者にここにいてよかったと感じてもらえるよう取り組んでいます。そうしてご利用者からいただける「ありがとう」が僕らの仕事の大きなやりがいです。

特別養護老人ホームでの看取り



特別養護老人ホーム愛全園
施設長 **丸山 和代** (中央)
介護課長 **大塚 叔功** (写真右)
介護主任 **宮城 哲郎** (写真左)

「看取り」とは

看取りとは近い将来、死が避けられないとされた人に対し、身体的苦痛や精神的苦痛を緩和・軽減するとともに、人生の最期まで尊厳ある生活を支援することです。特養での看取りは「その方らしさ」のある生活の場で行われることと、多くの専門職がおり安心できる環境が特長で、78.0%の老人福祉施設が看取りを実施しています。(平成28年度厚生労働省調査)

◎ 看取り介護の流れ

看取り介護は、入所時から始まっています。入所時面接では、ご本人の好きなこと、生活の中でやりたいことを聞き取り、その実現に努めています。看取り期の以前から、一日一日を大事にすることが大切です。また、最後の時間の過ごし方についても、ご本人の意向なども踏まえ、ご家族と共に考えながら最大限尊重します。死期が近づくと、看取りの専用居室に移動します。ここではお気に入りの服を着る、思い出の写真や好きなものを飾る、可能な範囲で好きな食べ物やお酒なども味わう、ご家族と過ごすといったことで、ご本人だけの場所で、その方らしい時間が過ごせる環境を整えます。また、永眠時にはエンゼルケア(死後の保清、化粧など)と、ご家族のメンタルケアも行っています。

◎ 愛全園スタッフの取り組み

夜間にスタッフが看取りを行う際の不安を軽減するため、医師による看取り研修を開き、夜勤者向けのマニュアルとエンゼルケア手順書を完備しました。
看取りは職員も喪失感を感じがちですが、最期まで関わることは後悔を軽減し自信につながります。スタッフの意識も向上し、その方らしく生きられるよう関わりたい、よい看取りのために多職種で協働したいという声もあがりました。今後もよりよい看取りの実践のため、職員全員で邁進します。

▶ 愛全園の看取りルーム



コラム1 介護は人として成長できる職場です ／高等学校福祉科教諭



東京都立野津田高等学校福祉科 主任教諭
岩川 亮太

介護は目の前の方の幸せを考える仕事で、幸せの在り方は人それぞれ異なるため、対象の方に寄り添おうとする気持ちが大切です。
生徒には「自分ならどんな人に寄り添われ介護されたいか」を常に考えるよう教えています。そのためにも、自身と向き合い自身を大切にすることが基礎となります。また、ときに介護は苦しく悩むこともありますが、そのときは自身が介護を志した原点を見つめなおすことが自信を取り戻すことにつながります。
生徒は講義・演習・実習のサイクルを経て学んでいきますが、実習での高齢者との出会いを通じて、自分の生き方を考え、人として大きく成長し、自分らしさが芽生えると感じます。生徒の卒業のときには「人との出会いで価値観が変わった」「ご利用者のおかげで自分の可能性を信じられた」といった声が聞こえることが多くあります。
介護は真摯に向き合うほど得られるものが多くあり、いつまでも学び深めていける仕事といえるでしょう。

コラム2 福祉施設では支え合いながら働けます ／介護現場スタッフ



大田区立たまがわ高齢者在宅サービスセンター生活相談員 介護福祉士
木村 綾乃

介護の現場では皆が支え合って業務を回しています。
私は腰痛を患いましたが、上司と相談して特養(入所施設・24時間シフト勤務)からデイサービス(通所施設・主に日中勤務)の勤務への異動となりました。人員の都合ですぐにはなりませんでしたが、異動までは平日はデイサービス業務で週末は夜勤と勤務を分散してもらいました。好きで始めた介護を続けたかったので、法人や同僚の協力にとっても感謝しています。
私自身、直接の介護が多くはできなくても役に立てるよう生活相談員の資格を取得し、相談を中心に業務にあたっています。
また、私自身の腰痛の経験から、若い方が腰を痛めそうな動きをしていたらフォローしたり、外部の腰痛予防研修を受けそれを施設で発信したりしています。
結婚の際にも周囲に協力してもらい、約1週間の特別休暇を2回いただきました。残業の自己管理もできており、月初と月末以外は定時で終了し仕事と家事を両立できています。お互いの負担に気づきがあることで、支え合いながら働ける職場です。